



由由 功起



作品 資料

9人の美容師でひとりの髪を切る

/a haircut by 9 hairdressers at once (second attempt)

2010年

素材:HD ビデオ

時間:28分

Production and commission: Yerba Buena Center for the Arts, San Francisco.

ノート:

このプロジェクトは、ひとつの行為を複数の参加者によって行うことで、共働作業の難しさ、美しさを捉えてみたいと思って作ったものです。僕たちは本当にコラボレーションをできるのだろうか、という疑問が出発点でした。

そこで僕はひとつの極端な状況を設定しました。ヘアカットを9名の美容師(それぞれ別々のサロンを経営していたり、別々の国から来たさまざまな人たち)によって共働させるというものです。彼ら・彼女たちは最初ソファに座り、どのように作業を進めるのかを話合わなければなりません。そのためにはどのようにカットを進めるかを絵に描いて考えたりしなければならず、参加者のひとりには「そんなことは普段しない」とこぼしていました。

またここでは僕自身はその進行にまったくタッチしていません。参加者は自分たちで問題を話し合い、解決しなければなりません。この映像は、その過程をおさめたドキュメンタリー・フィルムです。

僕たちはさまざまな背景を背負ってこの社会を生きています。社会とは、そうした別々の背景を持ったいろんな人びとの交わりによって成立しています。この作品の中ではその状況が、特殊なかたちで再現されます。複数の相容れない意見が乱立する社会。いわばその複数の意見がひとつの髪型に象徴される。でもそのあまりにありきたりな髪型の結果が、僕には暗示的に見えました。必ずしも共働作業というものが良い結果を生むものではないという意味で。



誰かのガラクタは、誰かの宝もの / Someone's junk is someone else's treasure.

2011年

素材:HDビデオ、ドローイング、ヤシの葉、ブランケット

時間:11分

ノート:

このプロジェクトでは、フリーマーケットのブースを借り、道ばたで拾ったヤシの葉を売ろうとしました。

アートは近年、経済活動として着目されています。ではそこで賭けられている価値とはどういうものなのでしょう。僕はそれを探るために、構造的に似ているフリーマーケットを利用し、特殊な状況を設定しました。フリーマーケットとは、様々なコレクターが集まる場所です。ビンテージの古着を求めるひと、切手コレクター、レコードを探すひと。そこではある人には全く無用なものが、別のある人にはとても価値のあるものとして取引されています。この構造はアートでも同じです。

そこに極端な事例を持ち込むことで何が見えてくるのか、それを僕は確かめたいと思いました。もっとも価値の無いと思われるものを隣に並べてみる。そしてそれを見た人びとの反応を映像に記録する。

そこで僕が感じたことは、人びとは、そのなんでもないものに反応すること、その反応そのものを楽しんでいるということでした。確かにアートにおいても、所有しにくいコンセプチュアルな作品をあえて所有しているということがコレクターの自尊心をくすぐります。

僕はきっとそのとき「もの」を売っていたのではなく、そこに生じるコミュニケーション、あるいはそのアイデアやストーリーそのものを売っていたのかもしれない。



パブリック・ペインティング(メトロ・バス、ライン2, ロサンゼルス)

/A painting to public (Metro Bus Line 2, Los Angeles)

2011年

素材:アクリル絵画、ドキュメント・ビデオ、自転車

時間:2分32秒

パフォーマンスの日程:12月28日2010年

ノート:

街そのものをひとつの美術館として捉えたとき、いったいどこに展示できるでしょうか。

ある日、LAを走るバスの正面に自転車を載せるラックがついていることに気づきました。街を美術館ととらえたとき、バスの自転車ラックをいわば絵を掛ける壁と考えてみる。このときこの「壁」(であるバス)は移動をつづけるので、偶然そこに居合わせた人びとがそのまま鑑賞者となる。いわばそれは移動する、仮設のパブリック・アートのようなものになりました。



美術館はいっぺんに使われる

2011年

素材:5つのビデオ作品、トレーシングペーパーに印刷された18のモノクロ写真、美術館の備品
ヨコハマトリエンナーレ2011、横浜美術館にて

ノート:

この展示は主に美術館の倉庫に眠る備品で構成されています。例えば展示台は、特定の展覧会のために作られ、その後時には再利用されることもあるようですが、そのほとんどは倉庫の中に保管されています。

ヨコハマ・トリエンナーレに参加したときに聞いたのは、通常の展覧会よりもより多くの作品クレートが海外から送られてくるということでした。そのための倉庫スペースがあまりなくて困っていると。僕はいわばそのネガティブな条件を逆手にとり、僕自身の展示のアイデアに積極的に使おうと思いました。なぜなら、アートとは自己表現であると同時に、そうしたネガティブな要素を変換する可能性を備えた、柔軟なものだと思うからです。問題を解決し、なおかつ展覧会に生かすこと。美術館の倉庫備品を会場に運び、ひとつのラウンジ・スペースとして、人びとが会場の中で休むことができる場所を構成しました。

美術館はこのように使われるべきである、というひとつの支配的な見方があるとして、これはそれを逃れるためのもうひとつ別の見方の提示でもあります。美術館の備品と展示物を平等に扱うことによって見えてくる風景、僕はそうした世界から何かを学び取りたいと思いました。

ちなみに会場の中には、近作のビデオや写真も含めた複数の作品を混在させて配置しました。



犬にオブジェを見せる / Showing objects to a dog

2010年

素材:HDビデオ

時間:3分56秒

Production and commission: Yerba Buena Center for the Arts, San Francisco.

ノート:

たまたま友人の犬を半年ほど世話をする機会があった。彼(シェイディ)は僕自身が日々やっている制作行為が気になったようで、興味深げに近づいてきた。そこで彼のために作品を作り、それに対する反応を記録してみた。

例えば、僕にとっては、作品の作り手による言葉というものはその作品を解釈・判断するためのひとつの材料にすぎない。複数の意見によって誤解も含めて作品が解体されることが望ましいと思う。ならば、むしろ、犬にも意見を聞くべきだろうと思う。いわばこれはそうしたオルタナティブな意見を取り入れるためのひとつの試みです。



何も繋がっていないが、関係しているかもしれないこと

/Nothing related, but something could be associated

期間:9/25から11/28、2010年

場所:イエルバ・ブエナ・センター・フォー・ジ・アーツ、サンフランシスコ

ノート:

美術館は通常、ひとつのストーリーにそって展示されています。まるで本を読むときのように一ページ目から順番に。しかし空間とは縦横無尽に移動できるものです。

僕はこの個展の中で、複数の道筋が可能な空間構成を考え、その中に複数の方向性をもった作品をばらばらに配置しました。見るひとはその中でそれぞれの繋がりを考え、それぞれの仕方でのこの展覧会を編集していきます。

作品が見るひとにとって開かれていることは必須ですが、空間そのものも多方向に開かれているべきだと思いました。もちろんなにも配置しないことも「開き」の方法かもしれませんが、ここでは文字通りに複数の方向性がある空間を作ることで、見るひとが空間の縦横無尽さに自覚的にアプローチできるようにしてみました。



屋根に登り、屋根から降りる/Rooftop, Going up and Step down

2009年

素材:HDビデオ

時間:8分38秒

アロー・ファクトリー(北京)企画による「just around the corner」展より

ノート:

屋根に登るためにはハシゴを使えば容易です。その容易な部分をひとに頼って見たらどうなるでしょうか。そのうえ、知らない土地で、見ず知らずのひとを頼ることはできるのだろうか。

僕は中国語をしゃべれないので、中国語で書かれたボード「あなたの車を使って屋根に登らせてください」「あなたの車を使って屋根から下りてもいいですか」を持ち、道行く車に声をかける。

例えば東京のような大都市では人びとは無関心を貫く。でも北京のこの路地ではいまだに近所づきあいが残っている。ならばこの僕の試みも可能ではないかと思った。つまりこれは都市の中の失われゆく人びとの繋がりを少し遠回りをして記録しようとしたものでした。



トンカツに聴かせたいミュージック(ドキュメント)

2010年

素材:HDビデオ

時間:31分

音楽と出演:HOSE

ライブ:2010年2月6日(とんかつ・つね、新潟にて)

ノート:

ものごとはきまって時間がかかる。定食屋で、例えばとんかつ定食を頼めば、そのオーダーから仕上がり、そしてそれを食べる行為をまとめた時間が必要になる。いくら先を急いでいても、その時間を使わない限り、とんかつを食べることはできない。ならばその一定の時間に沿ってなにか別の、もうひとつのものごとを進行させてはどうだろうか。バンドメンバーのひとりがとんかつをオーダーし、食べ終わるまでの間、プライベートなライブを行う。

ふたつのべつべつの出来事をひとつの制限の中に投げ入れることで起きる状況を記録する。ライブはとんかつに制限され、とんかつも同時にライブの影響を受ける。その相互作用によって見えてくる状況を観察する試み。



台北市内にある図書館を、それぞれラブストーリーを一冊ずつ借りることで、台北市美術館の中に移動させる/Relocate the Public Library in Taipei by borrowing one love story book at a time. Leave the book in the Taipei Fine Arts Museum. 2009年

素材：壁に書かれたテキスト、本棚、図書館から借りられた本

サイズ可変

台北市美術館での「Whose exhibition is this ?」展より

ノート：

ひとつのシステムを破壊するにはどのような方法があるだろうか。例えば自動販売機を壊すためには、バットをもってきてたたき壊すこともできるが、中身のすべてを買い尽くしてしまうことで機能不全にすることもできる。

なんら暴力的な行動に出るのではなく、僕らのいつもの行為によってシステムを壊すこと。このプロジェクトでは一冊の本を借りるという行為の積み重ねにより、その図書館を丸ごと移動させることができないだろうか、と考えたことが出発点だった。

通常的行為の積み重ねを再配置することで世界を変えるかもしれないという可能性を考える。もちろんこのプロジェクトはそれほど大きな関心を集めることなく、80名程度の参加による本の移動しか起こせなかったけれども。



タイトル:

タイトルについて考えたが思いつかなかった。でも以下のことがタイトルに関係する。

- 1) BankARTは海に面しているので展示室から海に出たいと思った。
- 2) BankARTには、だれかが作り発表した作品の残骸がたくさんあった。
- 3) なので廃品になった作品をつかってイカダをつくりたいと思った。
- 4) イカダが浮くかどうかは問題ではないけど、それがちゃんと浮かぶとよいと思う。

/

I considered the title of this work but it never come up. Following things could be related to the title.

- 1) I love to go out from the exhibition space because of BankART facing the sea.
- 2) There are so many trashes which some artists made and showed as art work before in BankART.
- 3) I want to make a raft using those trashes.
- 4) I think it's not a question that the raft float on water or not but it's good to be floating there.

2007年

素材: 14mのイカダ、ミクストメディア

BankART Studio NYK(横浜)での「La Chaine」展より

ノート:

このプロジェクトは、海沿いに展示場所があったことに影響を受けている。船出する、というのはさまざまなメタファーとして映画や小説などで描かれてきた。僕が残骸として残っていたさまざまな展示の断片、素材をこのアートセンターの倉庫の暗がりで見るとき、それらをなんとかつなぎ合わせてもういちど日の当たる場所に、屋外に、海に出られないかと思った。これは他のアーティストたちが以前関わった素材をリサイクルするプロジェクトであると同時に、それらをもういちど再起動させるためのプロジェクトでもあったと思う。



洗濯をする方法/How to wash my dirty clothes

2007年

素材:洗濯機、ロープ、洗濯物など

時間:2007年8月15日ごろから27日ごろまで

パウルクレーセンター(ベルン)での「spectacle and situaiton」展より

ノート:

最初にレンゾピアノによるパウルクレーセンターを見たとき、ベルンの丘を模したそのかたちが洗濯物を干すのに良さそうだなと思った。このプロジェクトはその思いつきをそのままシンプルに実現したもの。東京から自分の洗濯物を送り、美術館のセミパブリックスペースに洗濯機を設置してもらい、滞在中に洗濯をした。他の参加アーティストも使いたいといっていたので、自由に使ってもらった。

建築というのはあらゆる場所が特定の目的のために作られている、と思う。もちろん曖昧な場所はあるにせよ、廊下は決してキッチンとしては作られていない。美術館は、それでも、アーティストの要求に対して開かれているはず、ならば洗濯ぐらいはできるはずだと思った。ひとつだけ排水の問題があり、洗剤は使わず、自然素材を利用して洗濯をした。



すべてはすべてである/Everything is Everything

2006年

素材:8チャンネルHDビデオ、映像の中で使われている日用品

時間:それぞれ1分から2分

台北市美術館での台北ビエンナーレ2006より

ノート:

僕らを取り囲む「もの」には、それぞれ決まった使い方、使用目的がある。しかし僕らはその使い方や目的のすべてを把握していると言えるだろうか。もちろん使い方のよくわからないものも身の回りにはたくさん転がっているはずだ。ならばそれらの「もの」を集めて、どのような使用方法が可能かを試してみようと思った。ひとつのものに備わる関わり方の可能性を集める。

僕も含めた二人の友人と台北に行き、素材を集め、その反応を記録した。ほとんどの行為はその場で即興的に決定された。なぜなら現地では何が手に入るのかはわからなかったし、「もの」そのものから導き出せる素直な行為を記録したいと思ったためであった。



彼らの手の中にある石けん / Soaps in their hands

2008年

素材:写真

サイズ可変

ノート:

これは僕の実家の洗面台を写した写真です。そこにはたくさんの使い古された石けんがのっている。僕は実家に帰る度にそれらをきれいにし、両親の怠惰にあきれていました。しかし、ある日、ふとそこに今の僕が影響を受けているひとつのアイデアが隠されていることに気づきました。彼らはひとつの石けんを使い、それが使いにくくなったときにもうひとつ別の石けんを手にしします。そのくり返し。でもそこで彼らが試みていることは、無意識に使いにくいかたちを探しているということです。これらの石けんは、使いにくさのかたちを追求するがために集められたその結果です。

彫刻というものが、素材に手を加え、ひとつの決定的なかたちを探すのだとすれば、僕の両親が日々石けんを手にして行っていることは、彫刻のプロジェクトである、ということもできる。

